

琵琶湖博物館のリニューアル等について

1 第2期リニューアルオープンについて

交流空間を再構築し、平成29年度末から平成30年度にかけて順次オープンする。

項目	平成28年度				平成29年度				平成30年度		
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月
第2期展示制作業務 ①ディスカバリールーム【D展示室】 ②おとなのディスカバリー【E展示室】 ③ミュージアムレストラン ④ミュージアムショップ			実施設計		契約手続等		展示工事		一部オープン	オープン	11月
⑤ 樹冠トレイル整備工事	予備設計 地質調査		詳細設計		契約手続等		土木工事				オープン
⑥ 交流・休憩ゾーン整備工事 ※旧UNEP施設の一部改修		実施設計			契約手続等		建築工事		オープン	4/2	

※平成30年7月および11月のオープンに当たっては、それぞれ内覧会およびオープニングセレモニーを実施することで、重点的にリニューアルを発信し、来館者増につなげる。

①ディスカバリールーム【D展示室】 ～子どもと大人と一緒に楽しむ体験と発見～

「琵琶湖博物館の入口」となる展示室として、五感を使う体験型展示により学び、発見する喜びを知ってもらえる場とします。子どもと大人と一緒に楽しむことができる展示を増やし、楽しい博物館体験を通じて将来の博物館ファンが増えることを目指します。



②おとなのディスカバリー【E展示室】 ～大人も楽しめるリアルな知的空間～

大人の探究心に応え、学びと発見の場として繰り返し利用される国内博物館では初めての知的空間となります。標本や剥製などの多様な実物資料を手に取り、顕微鏡や図鑑などを使い、調べることができます。また、学芸員、資料整理員による資料整理などの活動を実演形式でわかりやすく来館者に伝えます。展示とフィールドをつなぎ琵琶湖や自然への関心を高め、地域や博物館活動への参加を促します。



③ミュージアムレストラン ～滋賀県産食材の魅力発信～

ふなずしや近江米といった展示と連動した食材や、地元の味を楽しめるレストランとして、琵琶湖地域の魅力を発信します。親子連れや高齢者、障害者など多様な来館者が利用しやすいメニューやサービスを提供します。ドリンクなどのカフェメニューを充実させ、展示観覧の合間の休憩にも利用できる空間とします。



④ミュージアムショップ ～博物館の感動をお持ち帰り～

展示室で扱うものを中心に、琵琶湖地域の様々な事柄に関連した商品を取り揃えたミュージアムショップとします。来館者が展示室で見つけた発見を、商品を通して、家に帰ってからさらに深め、広げていけるよう、そのきっかけとなるショップを目指します。



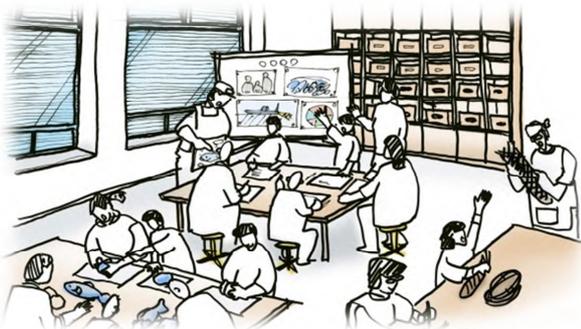
⑤樹冠トレイル ～琵琶湖と森を感じる空中遊歩道～

湖畔にある博物館の立地を最大限に活かして、琵琶湖を渡る風を感じながら屋外展示の森を上から観察できる空中遊歩道を整備します。樹冠トレイルの新設により、新たなシンボルが琵琶湖博物館に変わり、琵琶湖岸屈指の観光スポットとなることを目指します。



⑥地域団体と学校向け交流・休憩ゾーン ～団体による博物館利用の快適性向上～

既存施設（旧UNEP施設の一部）を改修し、多様な主体が活動できる交流空間を整備して活動の輪を広げます。また、団体や学校向けの屋内の昼食・休憩場所を整備することにより、博物館を利用しやすくします。

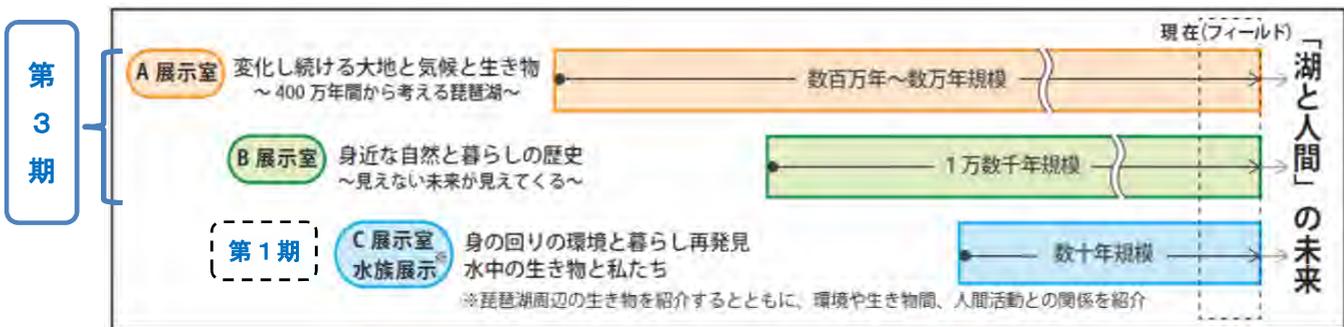


2 第3期リニューアル計画について

A展示室およびB展示室を再構築することとし、平成30年度に実施設計、31年度に着工、32年度にグランドオープンする。

	平成30年度				平成31年度				平成32年度	
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月
A・B展示室	契約手続等		実施設計		契約手続等		展示工事			オープン

(1) リニューアル概要



【A展示室】 変化する大地と気候と生き物 ～400万年から考える琵琶湖～

現状

- 「琵琶湖 400 万年のおいたち」
- 体験・体感型展示がない



リニューアル後

- 「琵琶湖 400 万年のおいたち」+「現在の環境問題との関わり」
- 「体験・体感型展示」(例：化石発見、氷河期の気候の体感)

→ ファミリー層 (親子) の利用者の増加



<地層の調査や化石をさがす体験>



<氷河期の気候 (-13°C)の体感>

【B展示室】 身近な自然と暮らしの歴史 ～見えない未来が見えてくる～

現状

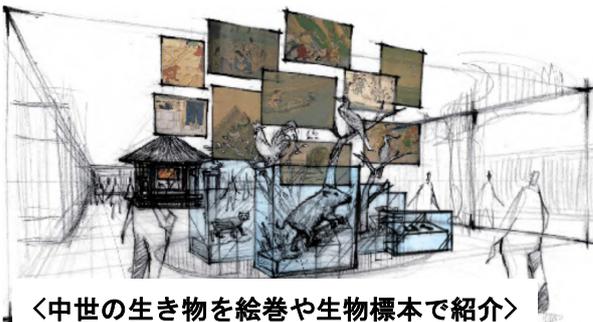
- 「人間活動の歴史」



リニューアル後

- 「人間活動+自然環境の歴史」
- 日本初の「環境学習」にも利用できる歴史展示

→ 学校団体の利用の増加



<中世の生き物を絵巻や生物標本で紹介>



<絵図や民具を使った森林利用と森の変化を紹介し、現在の森林問題(シカ食害、手入れ不足等)やエネルギー問題を考える糸口を提示>

(2) 事業費

「新琵琶湖博物館創造基本計画」で定めている展示構成やストーリー、発信力・集客力の高い魅力的な展示クオリティを基本として、既存展示物の再利用や一部資料のレプリカ使用等により、第3期の事業費は7.5億円とする。

<参考>

区分	第1期リニューアル	第2期リニューアル	第3期リニューアル
リニューアル対象	C展示室・水族展示	交流空間	A・B展示室
事業費	総額 約29億円		
	(約14.9億円)	(約6.3億円)	(約7.5億円)

※第1期は決算額

H24 (2012)	「新琵琶湖博物館創造ビジョン」の策定		
H25 (2013)	「新琵琶湖博物館創造基本計画」の策定		
H26 (2014)	設計		
H27 (2015)	施工		
H28 (2016)	施工・オープン	設計	
H29 (2017)		施工	
H30 (2018)		施工・オープン	設計 (0.32億円)
H31 (2019)			施工 (7.13億円)
H32 (2020)			施工・オープン

3 来館者数について



〔 H29. 4～H30. 2 実績
389, 266 人 〕

【来館者減の要因】

- 第1期および第2期リニューアルの谷間の年度であったため、メディアの露出度が低下
(H28 : 743 件 → H29 : 541 件 ※ 2 月末時点比較)
- GW期間や夏休み期間の来館者が伸び悩んだ

【平成 30 年度の取組】

- 年間を通じて切れ目ない第2期リニューアルオープンを最大限活用
 - ・特に樹冠トレイルは滋賀県の新たな観光名所となりえる素材
- メディア露出度を向上させるための広報メディア戦略の拡充
 - ・館内体験ツアーの実施、企業や学校との新たなコラボ商品販売、観光キャンペーン「虹色の旅へ。滋賀・びわ湖」(H30. 7～12) との連携などの取組を充実
- GW期間の前から広報開始 (地方創生推進交付金事業を年度当初から着手)
- 教育旅行・団体旅行の誘致に向けた取組を強化
 - ・包括連携協定企業 (旅行会社) と連携した取組などを新たに開始
- 平成 30 年度から「うみのこ」の烏丸半島の寄港地復活予定を学校に PR する取組を強化

4 県内各地のフィールドへ誘うための活動について

琵琶湖博物館では、「フィールドへの誘い」というテーマを掲げ、館内における展示活動のほか、館内外における観察会・見学会等の交流活動を通じて、県内の各地域(フィールド)に目を向けるためのきっかけとなることを目指している。

(1) 交流活動

学芸員が各地へ出かけ交流を行う現地観察会、地域連携活動、「はしかけ」「フィールドレポーター」による調査・研究活動や移動博物館活動等を通じて利用者と博物館との双方向の交流を実施している。

ア 観察会・見学会等

くつきの森「ユリノキまつり」における森の観察会、田んぼの生き物観察会など館内で10件、館外で7件開催したほか、他の主体により周辺地域で実施された観察会ではヨシ帯の観察と博物館のヨシ展示を連動させた取組等を実施。(H29年度参加者418名)

【平成30年度】

- ・ 第2期リニューアルで新設する「樹冠トレイル」において、琵琶湖や動植物を題材に「琵琶湖の形と容(かたち)」、「森の歴史」、「さまざまな樹木の形態」などをテーマとした観察会や観察ガイドツアーを実施する。
- ・ 平成30年度に南湖におけるビオトープ拠点として「下物ビオトープ」が整備され、自然と触れ合う場が創出されることから、これを活用した環境学習を推進する。
- ・ これまで観察会・見学会等を実施していない地域については、地域の関係団体等と調整し、開催できるよう努める。

イ 地域連携活動

主に活動団体や地域の自治会、小学校、大学、企業などからの依頼により、出前講義や学習会などを館内で40件、館外で36件開催。(H29年度参加者3,496名)

【平成30年度】

- ・ 出前講義などは、これまで学校や団体の依頼を受けて受動的に実施していたが、今後は博物館から共催での実施等を働きかけることにより、実施主体との関わりを深め、事後の実践活動につながる、より充実したプログラムを提供する。

ウ 「はしかけ」・「フィールドレポーター」による調査・研究活動

「はしかけ」では、現在 22 グループ、352 名の登録者により、里山体験や、田んぼや河川での生き物調査、化石発掘調査などの調査研究活動を行っている。

また、「フィールドレポーター」では、現在 204 名の方が「地域学芸員」として活動しており、特に今年度の「カイツブリ調査」ではカイツブリの新たな生態状況の発見があり、新聞に掲載された。

【平成 30 年度】

- ・ 「はしかけ」等の団体相互の交流により新たな活動への発展が期待できることから、第 2 期リニューアルで旧 UNEP 施設を改修し新設する「団体交流室」を活用し、日常的な交流機会の充実を図る。
- ・ 一層の交流・連携を促進するため、新たに全団体が一堂に会し、パネル展示や活動報告等を行う「交流会」を開催する。

(2) 環境学習センター

次世代を担う子どもや若者の環境活動をより活性化するため、県内で環境活動を実施している子どもたちの交流会「淡海こどもエコクラブ交流会」や、学生たちの交流会「びわ博 学生ミーティング」などを実施。(H29 年度 館内 5 回、館外 3 回)

また、企業が所有するビオトープを使って小学校の理科学習を行うなど、環境学習推進のため、企業と地域との連携を図る事業を実施。(H29 年度実施企業 7 社)

【平成 30 年度】

- ・ 企業は、ビオトープを所有しているものの、環境学習プログラム作成のノウハウ不足や、指導者の不在などから、十分活用されていない。
このため、平成 30 年度は「環境学習プログラムに関する交流会」を開催し、企業と環境学習活動に実績のある指導者のマッチングや、新たに企業と大学生の活動団体との交流を進めることで、企業のビオトープが環境学習の場として活用されるよう支援する。

(3) 移動博物館活動

広報活動の一環としてブースを出展するとともに、滋賀県の PR ツールとして展示キットの貸出しを実施 (H29 年度 県内 13 か所、県外 7 か所)。

情報発信拠点「ここ滋賀」のオープニングでは「空から見た琵琶湖」を展示し、琵琶湖や滋賀の豊かな自然を PR し、魅力を発信。

【平成 30 年度】

- ・ 来館者の増加には、博物館の県外での認知度の向上が大きな課題であることから、京阪神地域や首都圏でのイベント等の場を利用して、博物館の魅力を周知するため、移動博物館キットが活用されるよう積極的に働きかけていく。